

## 張文環小說的女性悲劇 -透過與婚姻的關係-

北見吉弘 \*

### 摘要

張文環的小說中，經常出現在日治時期的台灣社會，極具魅力的女性們。但是因為當時根深蒂固的封建制度，女性常被描繪成男尊女卑的受害者，悲慘又不幸，因此張文環小說中很多作品都以女性悲劇收場。

本次研究主要著眼在張文環小說的女性悲劇與傳統封建婚姻的關係，並探究張文環小說中婚姻與女性悲劇的關聯性。

關鍵詞：張文環、台灣文學、女性、新女性、結婚

---

\* 育達科技大學應用日語系助理教授



# Tragedy of Heroines Written by Zhang Wen-huan - Through the Relatedness with Marriage Proposal -

Yoshihiro Kitami \*

## Abstract

Zhang Wen-huan's novels, the historical background in Japan colonial rule period, the location becomes the Taiwan local communities and there appeared many charming Taiwanese heroines in his novel works. But, those days are feudal system is deep-rooted, they woman always the victim of male chauvinism, and become a harsh and unhappy person. As a result, many of Zhang Wen-huan's novels was related to the woman tragedy.

This time, the point that I was paying attention, is that the woman tragedy of Zhang Wen-huan's novels are always related to the marriage proposals brought by feudal tradition. And I discussed the relationship between those marriage proposals and women tragedy in Zhang Wen-huan's novel works.

**Keywords : Zhang Wen-huan, Taiwanese Literature, Woman, New Generation Woman, Marriage**

---

\* Assistant Professor, Department of Japanese, Yu-Da University



# 張文環小説にける女性の悲劇 —縁談との関係をめぐり—

北見吉弘 \*

## 要旨

張文環小説には、日本殖民統治期の台湾地方社会を背景に魅力的な台湾人女性が多く登場する。だが、当時は封建制度が根強く、それら女性は常に男尊女卑の被害者、過酷で不幸な人物として描かれている。結果として張文環小説の多くの作品が女性悲劇に関連するものとなっている。

今回の研究では、張文環小説の女性悲劇が常に封建伝統がもたらす縁談に関連していることに着目した。そして、ここに張文環小説における縁談と女性悲劇との関連性を探った次第である。

キーワード: 張文環、台湾文学、女性、新女性、結婚

---

\* 育達科技大学應用日本語学科 助理教授



# 1 序

張文環小説作品は日本殖民統治下にあった台湾の地方における封建社会を背景とする。そのため、作者の小説に登場するヒロインは往々に当時の封建社会の支配下にあった男尊女卑や父権制度の影響により、被抑圧者たる人物がかなりを占める。また、これらヒロインは主に魅力的な女性として読者の関心を集めるに十分な人物であるが、物語の進展に従い、縁談や結婚をめぐる被害者となるのが常で、悲運や破滅や苦難を被る傾向を呈している。

今回は張文環小説におけるヒロインの悲運の要因が主に縁談の場面に置かれていること、即ちヒロインが縁談を境に不幸で破滅的な生活に陥いるという内容展開に着目し、女性悲劇と縁談との関連性を探った次第である。研究の手順としては、まず張文環の小説作品の分析、関連人物の限定と分類、続いてそれらヒロインの縁談を通じた悲劇の様相、最後に縁談の影響で形成されたヒロインの特殊性を提示した。

先行研究に関しては、今回は張文環小説でも代表的なキャラクターである新女性像やインテリ女性像などを扱っているため、関連研究はかなり多くなるが、今回の筆者の研究の如く全ての女性像を包括し分析した研究は限られる。今回は張文環小説に広く登場したヒロイン像を包括したものであり、直接的には筆者の手による他のいくつかの研究が主な先行研究となっている<sup>1</sup>。

## 2 女性悲劇に関連する作品とヒロイン像

張文環小説は、作者による伝統的な封建主義に限らず、近代化、資本主義などへの社会批判が強く示され、その小説作品では被抑圧者側である無産階級にあたる庶民の実際の生活を題材にしたものがほとんどを占める。今回の女性悲劇のヒ

---

<sup>1</sup> 一つは張文環小説における全ヒロインの相手男性を探った「張文環の小説に登場する女性の結婚相手に関して」（世新日本語文研究2011年4月）で、主な研究対象は男性人物であるが、縁談相手たる人物の登場が多く今回の研究の参考となった。もう一つが「張文環小説ヒロイン像の恋愛感情の対処 - 破滅と生存めぐり」（『育達科大學報』37, 2014. 04）が挙げられ、ここでは新女性と旧女性のあいだでの適者生存の様子が記されている。今回と異なるのは、今回が女性悲劇に的を絞ったこと、更にその女性悲劇の構成要素である縁談の実態を探ったところにある。



ロインとして描かれた人物は全て無産階級出身者、即ち一般庶民の設定となり、貴族階級や特権階級に属する人物の登場はほとんどない。とりあえず張文環作品に描かれた女性を以下に整理した。

「落蕾」(1933.07.15)の「秀英」

魅力：学問好きな「文學少女」。適齡期にある新女性。

悲劇：不倫と墮胎がばれて縁談が破談、物語はその自殺を匂わせ終了。

「みさを」(1933.12.30)の「翠鳳」

魅力：性的魅力を持つ若妻。

悲劇：孤独な新妻であり、不倫が知られ進退窮まる。

「二人の花嫁」(1938.10.01)「阿嬌」

魅力：早期の公学校卒業生（「インテリ女性」を意味する）。

悲劇：婚期を逃し老齡男性との結婚を余儀なくする。

「山茶花」<sup>2</sup>（新聞連載<sup>3</sup>）の「娟」

魅力：公学校で優秀であった新女性。適齡期にある。

悲劇：親に強要された縁談を逃れるべく主人公男性との奔走を謀るが失敗し進退窮まる。

「山茶花」（新聞連載）の「錦雲」

魅力：主人公男性が慕う「姉」。古典的女性として描かれた旧女性の理想像。

悲劇：不本意な縁談に妥協し、結婚後に虐げられる。

「芸妲の家」(1941.05.27)の「采雲」

魅力：適齡期の女性。「芸妲」の身の上で男性達の寵愛を得る。

悲劇：金で買われた媳婦仔で、恋愛中の男性との縁談を望むが義母に拒

<sup>2</sup> 張文環の小説作品の多くが、1933年から1944年における発表である。その後の作者による小説作品の創作は見られず、ただ、長期間の休止をはさみ1972年に執筆が始められ1972年発表の長篇『地に這うもの』が見られる。1944年までが作者の主要な“作家活動期”だと言えるが、今回の研究範囲では、作者の晩年の作品である『地に這うもの』は含まれない。なお本論文では作品を示す際、多くが短編集や雑誌に収められた一篇であるため「」が用いられているが、一冊の著作たるに相応しい『山茶花』、ならびに実際に日本で出版された『地に這うもの』も方便上、それぞれ『』は用いずに、「」を以って記すことにした。

<sup>3</sup> 『台湾新民報』連載1～111回。1940.1.23～1940.5.14



絶され自殺。

「部落の惨劇」(1941.09.01)の「淑花」

魅力：適齡期の娘、結婚が待たれ、異性の関心を引く。

悲劇：媳婦仔であり、不徳な男性との結婚が待たれる。

「閹雞」(1942.07.11)の「月里」

魅力：性的魅力を持つ若妻。

悲劇：父親に利害結婚を強いられ結婚後不幸な生活を送り、愛する男性との不倫が知られ自殺。

「地方生活」(1942.10.19)の「淑」

魅力：適齡期の娘。女学校卒業のインテリ。

悲劇：生活の安定した男性との良縁をまとめるが、利己的な性分が祟り、家族から絶縁される。

「媳婦」(1943.11.17)の「阿蘭」

魅力：適齡期の娘。義理の両親の信頼を得る。

悲劇：媳婦仔であり、不徳な男性との結婚が待たれる。

「土の匂ひ」(1944.7.1)の「玉鑾」

魅力：主人公男性の恋愛相手。古典的女性として描かれた旧女性の理想像。

悲劇：結婚後、嫁ぎ先との確執で離縁。

以上に挙げたヒロイン像は、主人公<sup>4</sup>、或いは男性主人公をとりまく周辺人物の設定であり、張文環の関連作品の大部分から抜き出した。ちなみに、悲劇型のヒロインではなく、幸運型のヒロインに属する人物も僅かながら例があるため、この点に関する説明をしておきたい。関連人物は四人となり、「父の要求」嘉津子、「山茶花」嬋、「地方生活」婉仔、「土の匂ひ」節となる。ただし、これらが特に今回筆者の主張するところの張文環のヒロイン設定の主軸が女性悲劇にあ

<sup>4</sup> 女性が主人公でありながらリスト外である作品は「辣蕪の壺」(1940.04.01)、「過重」(1935.12.28)、「雲の中」(1944.11.10)、そして晩年の「地に這うもの」(1977)である。まず、「辣蕪の壺」、「過重」、「雲の中」の三作品は女性が主人公であるが、下層社会の庶民生活を描いた作品に属し、女性悲劇には属しないと判断した。そして、「地に這うもの」の場合、これは長期間の作家活動休止を経て1977年に出版されたもので、作者の作家活動期(1933年頃から1944年頃まで)から長年の空白の後の発表のため、人物造形にかなりの飛躍があるからである。



るという考えを覆すに足りるものではない。まず、「父の要求」嘉津子と「山茶花」の嬋の二者は作者が貴族階級或いは資産家の娘に設定し、当初から女性悲劇が意識されていなかった人物である。続いて「山茶花」、「地方生活」、「土の匂ひ」の三作品はヒロインが複数描かれた作品であり、すでにヒロインの一人が悲劇的人物として設定され、人物描写における深さは主に悲劇的ヒロイン側に置かれている。即ち、張文環のヒロイン設定の機軸はあくまで女性の悲劇に置かれていたと見るべきである。

### 3 女性悲劇と縁談の関連性

前項の整理と分析の結果、ヒロインをして悲劇に陥れる所在が以下の点となる。

第一点：張文環作品のヒロインの悲劇は、その人物設定が適齢期にある娘か、結婚して間もない若妻であるのが常で、相手男性を決める縁談が常にその生活に大きな影響を及ぼしていること。

第二点：ヒロインを待つ悲劇的人生の要因が、縁談の失敗、或いは歪んだ縁談が要因となる傾向が強く、ヒロインの生存と破滅をめぐる命運を下す意味で、縁談たるものが重要な役割を担っていること。

以上二点が、作者によりヒロインに対して因果応報たる意味での悲劇的展開が設けられた要因である。

続けて、以下では縁談を通じのリストに挙げた人物を、悲劇の様相が現れる傾向をもとに以下の二種に分類した。

第一種：縁談の段階で悲劇がもたらされる例

第二種：縁談が災いし結婚後に悲劇がもたらされる例

まず、第一種に属する人物が「落蕾」秀英、「二人の花嫁」阿嬌、「山茶花」娟、「芸姐の家」采雲、「地方生活」淑である。そして、第二種に属する人物が「みさを」翠鳳、「山茶花」錦雲、「部落の惨劇」淑花、「闖雞」月里、「媳婦」阿蘭、「土の匂ひ」玉鑾となる。

この二者を比較した結果、かなり鮮明な違いが明らかとなった。以下の通りで



ある。

第一種：縁談の段階で悲劇がもたらされる例

＝ 新女性型：公学校教育を受けた新世代の女性

第二種：縁談が災いし結婚後に悲劇がもたらされる例

＝ 旧女性型：公学校教育を受けない世代の女性（媳婦仔を含む）

第一種となる新女性の場合は縁談がもたらされるまでの前後の時期が中心となり、結婚後の生活場面は描かれていない。そして、第二種である旧女性の場合、多くが縁談がまとまり結婚が実現された人物である。また、媳婦仔の場合は幼女の頃に縁組がなされ、既に結婚相手の家庭における家族となっているケースとなる。だが、いずれも悲劇のヒロインとして不幸な身の上は描かれ、ヒロインにもたらされた縁談が全てが欠陥がらみとなっている。ここで言う欠陥とは、その所在が男性側にある場合と、ヒロイン側にある場合の双方を含む（詳細は後述する）。

#### 4 縁談をめぐるヒロイン－新女性に関して

ここでいう新女性とは学校教育を受けた女性を対象となり、当時の義務教育であった公学校教育、ないし女学校や大学などの高等教育を受け、新思想の影響を強く受けた女性である。

まずこれら関連するヒロインが被った悲劇が如何なるものか、関連作品からその様子を見てみたい。なお「芸姐の家」采雲の場合はヒロインが縁談を望み、それによってもたらされた悲劇が描かれているが、「芸姐」の不幸な実態を描こうとして著された特殊な題材の作品であるため、今回は割愛させていただきたい。<sup>5</sup>

---

<sup>5</sup> 以下は中島利郎の見解では「薄倖の女性の生涯を描いた張文環の代表作。台湾女性の内面が台湾花柳界の風俗とともに描写された傑作」とある。（「張文環作品解説」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 340。





#### 4.1 「落蕾」、「山茶花」における結婚適齡期の新女性

「落蕾」、「山茶花」両作品は、公学校で優秀な成績を得た才女タイプ<sup>6</sup>の設定だが、作者は敢えて封建的な縁談に適さない人物を想定したのであると思われる。また、ヒロインの交際中の相手男性もいずれも知識人型であり、「落蕾」秀英の恋人が日本の大学留学生となるべく日本への渡航を控えた青年、「山茶花」娟の恋人が日本で大学留学中の大学生（毎回、帰郷した際に娟との交友を強める）の設定で、最高学歴取得を目指す知識人男性となる。だが、男女の自由恋愛は社会風紀を乱す行いに等しく、双方ヒロインの家長は娘のために良家との縁談を設ける。縁談相手の設定も、共に大型雑貨店の跡取り息子<sup>7</sup>となっている。ヒロイン側からすれば、「身分も違ふほどの金持からの縁談」<sup>8</sup>であり、「毎日生懸命店を経営している」「過分な配偶者」<sup>9</sup>である。普通のヒロインが悲劇のヒロインと転ずるのがまさにこの“縁談”の場面にあることが着目される。

物語では、秀英が縁談を受諾、娟が縁談を拒絶という違いがあるが、双方を待つのが悲劇的結末である。秀英はかつての恋人との男女交際で妊娠したのであるが、金持ち男性との結婚を目論み密かに墮胎する。だが事実が相手に露呈し、縁談破棄だけでなく、世間から殺人罪に問われるのではないかという苦境に陥るのである。そして、娟のほうは恋人のいる日本への遁走を目論み、両親に露呈され信頼を失い、相手男性（日本留学の大学生）からも一方的に関係を解消される。両作品の最後の場面を見るに、その悲劇的結末はヒロインの自殺を匂わすという共通点が見られる。<sup>10</sup>

<sup>6</sup> 「落蕾」秀英の場合は公学校時代に「文學少女」としての誉れを持つ勉強好きな女性として知られ、「山茶花」娟に至ると級内で一番、二番を争うほどの成績を収め、担任から級長を任されるほどの女性である。

<sup>7</sup> 「落蕾」秀英の相手が「大雑貨店の息子K」（同注8、p. 17）、「山茶花」娟の相手が「O庄の一ばん大きな雑貨店（の跡取り）」（同注9、p. 335）となる。

<sup>8</sup> 張文環、「落蕾」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 20。

<sup>9</sup> 張文環「山茶花」中島利郎（編）（2002）『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京：緑蔭書房、p. 333。

<sup>10</sup> 以下は関連箇所の引用である。「落蕾」：「こんな始末になつたのだ。母は全く親娘心中でもしたかつた。（中略）再び死の誘惑が彼女を襲うた。」（同注8、p. 30）、「山茶花」：「死んでやろうかとどつと地面に叩きつられたやうに、ぐつたり床に伏せたまゝであつた。」（同注9、p. 339）



## 4.2 「二人の花嫁」、「地方生活」におけるインテリ型の新女性

ここで言うインテリ女性とは学校教育を通じた高学歴を有する新女性であり、前述した新女性よりも更に現実主義的な人物である。まず、「二人の花嫁」阿嬌は、公学校の「その街の公学校の第二回か第三回目の卒業生」<sup>11</sup>とあり、新女性ヒロインでは最高年齢となるが、「三十何年まへの女の公学校の卒業生といへば珍しい」<sup>12</sup>もので、縁談の条件は良かった。いっぽう「地方生活」淑の場合、時代背景が新しく、女学校卒業生としての設定である。ただし、ヒロインにとっての学歴取得とは、「醫者さんか、公学校の訓導先生」<sup>13</sup>（阿嬌）、「醫者の玉子」<sup>14</sup>即ち医学専門学校の学生（淑）との縁談確保にあり、前述した新女性と同様、意中に有る男性との縁談獲得に他ならない。また、これら女性における悲劇はそれら縁談に対する執着心がもたらしたものとなっている。

「二人の花嫁」阿嬌の場合では、執拗に努力し選り好んだ結果、婚期を逃し、「縁談のすみこへ押しやられて、忘れられてしま（い）」<sup>15</sup>、最後は親子ほど年齢の違う商店経営者との縁談をまとめる。「地方生活」淑の場合では、縁談の条件をよくすべく家族に強引に遺産の分配を要求し、これが災いし家族から絶縁状を出されるというものである。

以上、これらインテリ型の新女性像の登場は前述した義務教育を受けただけの新女性よりも作品発表が遅いぶん、その性格描写はより現実味を高めている。即ち、非理想的な縁談を逃れるべく手段として、「落蕾」秀英らの盲目的<sup>16</sup>な自由恋愛行為という非現実的手段よりも、着実な高学歴取得による綿密性、確実性のある手段に変わっている点で、新女性の有する緻密的な計算高さや飽くなき生への執拗がより実質的となっているのである。

つまるところ、これら二種類の新女性に対して作者が悲劇的な結末を用意した理由とは、主に作者のその人間性や道徳心の欠如に対する批判が主となっている

11 張文環、「二人の花嫁」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 95。

12 同注11、p. 95。

13 同注11、p. 95。

14 張文環、「地方生活」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 109。

15 同注11、p. 95。

16 以下は関連箇所として「落蕾」からの引用である。「この戀愛は互の理想と云ふよりも必然的に引ずれて行く戀である。（中略）彼女は義山へとひそかに心を寄せてみた。盲目的と云へば盲目的で本能的だった。」（同注8、p. 20）



のである。

## 5 縁談をめぐるヒロインー旧女性に関して

旧女性ヒロインの存在は、作者が自分より前の世代の女性を意識して描いた人物が多く、多くが新女性の如く学校教育を受けなかったころの女性が対象となる。

以下、これら旧女性ヒロインの縁談の様子を見てみたい。はじめに結婚後の様子が描かれた「みさを」、「山茶花」、「闍雞」、「土の匂ひ」四作品のヒロイン、続いて媳婦仔であり養女としての縁談がまとまった「部落の惨劇」、「媳婦」二作品のヒロインの順に論を進めたい。

### 5.1 「みさを」、「闍雞」、「山茶花」、「土の匂ひ」における旧世代の女性

まず、「みさを」、「山茶花」、「闍雞」、「土の匂ひ」の四作品のヒロインのうち、「みさを」翠鳳のみ縁談の場面が設けられていない。そこにあるのは夫の長期不在宅により寡婦の如く生活を強いられた若妻の生活であり、最後はある男性との不倫関係が露呈し窮地に陥る場面を以って未完のまま物語は終了する。だが、張文環小説における女性の結婚後の不幸は常に結婚相手の道徳性、人格、生活力、或い嫁ぎ先の姑などに問題があり、縁談そのものに大きな原因があったのは確かである。<sup>17</sup>

以下、旧女性に属するヒロインの不幸がいずれも歪な縁談が要因となっていることにも関連し、関連作品に於ける女性の悲劇を見ていきたい。

「山茶花」錦雲、「土の匂ひ」玉鑾、「闍雞」月里ともに、持ち込まれた縁談が「渡鳥の様な反物の行商人、製糖會社の女工監督、雜貨店の与太者見たいな若主人」<sup>18</sup>であるが、ヒロインは、家長の決めた縁談に従順になるのみである。

<sup>17</sup> 以下は関連箇所引用で有る。「翠鳳の夫は男性的で氣が荒らく、見かけばかりは頼母しいが、事實家庭になると冷いのであつた。それに反して徳順は見かけはおとなしいが、内幕は情熱だつた。――冷い家庭で凍へさうに顛へてゐる彼女は、火を見ひ出したやうに徳順に對する思慕は致命的な戀にお落いつて了つた。」ここでは愛情に満たされない若妻の孤独が描かれているのである。（張文環「みさを」、『日本統治期台湾文學 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 34）

<sup>18</sup> 同注9、p. 66。



「雞に嫁げば、鶏の後ろに従いて飛び、犬に嫁げば、犬に従いて走る。（中略）女の運命は婚家と同じである」<sup>19</sup>、これは「閨雞」月里の実父がヒロインに縁談を承諾させ、その後の嫁ぎ先での心構えを諭した一文であるが、儒教の婦徳觀念として従順であるべく強いられた旧女性は何にせよ家長の命に従うのが常であり、新女性の如く縁談への執拗な反逆精神は持たないものである。

新女性の縁談への態度が拒絶ならば、旧女性の場合は従属である。このことを示したのが、「山茶花」錦雲の「数十回の縁談に疲れてみた」<sup>20</sup>様子であり、旧女性が幾度も妥当な縁談を待ち込まれていた様子が描かれながら、当事者たるヒロインは常に一つ一つの縁談を吟味し、最終的な選択を迫られる受身型に徹するのみである。即ち、旧女性は理想的な縁談相手を得ることより、結婚の成立のほうを念頭に置いているのである。そのため、悲劇のヒロインたる展開は常に結婚後の段階に現れ、「みさを」翠鳳を含め、男性側や嫁ぎ先での人間関係の問題により過酷な扱いを被るのが常である。

まず、「山茶花」錦雲の場合、結婚後、嫁ぎ先では姑から精神的虐待を被り<sup>21</sup>、夫からも冷淡に扱われる。やがて姑の死を願い、人を「恨まなければならぬ」日々の中に「不幸のなかの不幸」<sup>22</sup>を感じるのである。続く「土の匂ひ」玉鑾は「山茶花」錦雲の分身であり、錦雲の結婚生活の失敗のその後を描いた女性であり、物語では姑との折り合いが悪く離縁されて実家に戻された役柄である。<sup>23</sup>そして、「閨雞」月里の場合、漢方薬店老舗を経営する父親の利害結婚に利用され、結婚後、病気で無能者となった夫を世話しながら、寡婦の如く生活を余儀なくされ、最後は、ある男性との不倫関係が村人に知られ心中自殺をする。<sup>24</sup>

以上の如く旧女性ヒロインの場合、不合理な縁談に際して、無抵抗かつ従順に

19 張文環、「閨雞」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 255。

20 同注9、p. 212。

21 同注9、p. 232～234を参照。

22 同注9、p. 234。

23 以下は「山茶花」錦雲との関連性が示された箇所引用である。「この娘が出戻りとは、ここにも一つの悲劇があると清輝は思はずにはみられなかつた。話に依ると姑との折合ひが悪くて、追はれるやうに里にかへつてきたと云ふのである。顔は百姓女には、どちらかと云ふと不向きで、（以下省略）」（同注9、p. 40）。

24 以下は関連箇所引用である。「病んでゐる亭主を持つ女として未亡人と同じやうな生活を強ひられてみた。」（同注19、p. 237）



受け入れた姿勢が災いし、結婚後にそのつけが回る展開となっている。即ち、このような不合理な習慣に対する無抵抗主義こそがヒロインをして悲劇的な人生をもたらした要因となったと言えるのである。

## 5.2 「部落の惨劇」、「媳婦」における媳婦仔

「部落の惨劇」、「媳婦」の二作品に扱われたヒロイン淑花と阿蘭はいずれも媳婦仔<sup>25</sup>であり、縁談が幼くして既に決められた境遇にあり、その没個性的な様と無抵抗主義ぶりはより徹底している。主に幼女期間から厳しく儒教道徳を叩き込まれ、常に養父母との関係構築に緊張感を強いられた関係上、既に論じた旧女性よりもより抑圧された身の上であり、幼くして養父母と同居し常に生存を脅かされる過酷な境遇に置かれていた。また、これらヒロインが将来的に不幸になることは運命論的なものであり、それは以下の「部落の惨劇」からの引用を見てもらえば理解できよう。

たゞ媳婦仔と云ふのは、小さいときから兄妹の如く育てられてきた>めに、その子供時代の不恰好な印象が脳裡にしみついてゐて、他人が見るほど淑花に魅力をかんじないのである。<sup>26</sup>

以上は、一般的に認識された媳婦仔の問題点である。養父母にとっては娘同然に育てた女性が嫁になることは親孝行に尽くすので喜ばしいものだが<sup>27</sup>、当事者である男女にとっては兄妹として育った身の上、男女の愛情がわからず、結婚生活がしっくりこないのである。これは既に一般論であるため詳しい説明は省かせていただく。それを裏付けるかの如く、淑花、阿蘭の相手男性（義理の親の長男）はいずれもヒロインとの結婚から逃避し、都会での女遊びに明け暮れる様子が作品に描かれている。この二作品のヒロインの悲劇は逃れられないものであ

<sup>25</sup> 媳婦仔と息子の嫁にするために幼いときから貰ったり買ったりして育てられた女性、息子が成長するまでは下女として働かされる。

<sup>26</sup> 張文環、「部落の惨劇」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 150。

<sup>27</sup> 以下は「媳婦」よりの関連箇所からの引用である。「阿蘭は三つときから楊家に貰はれてきた、勿論養女ではなく、媳婦仔なのである。つまり阿全の嫁になるべき養女である。だからこの家の娘のやうに育てられてきた。親として、自分の家風に合った娘が望ましいのである。息子が可愛ければこそ、かういふ娘が必要なのだ。だから両親は自分の手塩にかけた娘が嫁でありたいために、阿全の両親は阿蘭を媳婦仔にもらつたのである。」（同注37、p. 312）



り、結婚後、淑花、阿蘭らが、他の作品に描かれた旧女性ヒロインと同様、或いはそれ以上に男性側の不倫や放蕩ぶりにより孤独で不憫な生活が強要されることが想像できるのである。

旧女性ヒロインの場合、縁談が纏まるまでは実家での保護を受け、結婚後にはじめて従順で無抵抗な性格をより強くする傾向にあるが、媳婦仔の場合、貰い受けた家庭の所有となった幼女時期から絶えず下女として働かされ従順となるべく躄を叩きこまれる。そして、義理の両親の機嫌を損なわず、将来の縁談を成立させるための生活基盤確保に専念するべく、精神面での緊張感を余儀なくされている。だが、ヒロインが媳婦仔たる身の上、前述の如くその将来的な生存基盤は極めて脆弱であった。

以上、媳婦仔ヒロインを主人公とした作品は、義理の両親の監視下のもと、近くその不徳な息子との結婚が予想される結末となっはいるが、ヒロインの不穏な将来性が感じられる後味が悪いものとなっている。

## 6 新・旧ヒロインの特殊性－縁談を通じた性格形成を通じて

ここまで論じてきたのは、主に封建時代における縁談のありかたが、常に女性の成長期や適齢期、或いは結婚後の生活において、その性格形成に多大なる影響を及ぼすものであるということである。

### 6.1 新女性の人格形成－縁談への警戒心を通じて

新女性の場合は、縁談という問題に際して、往々に利己的、反道徳的、打算主義的な態度を示すもので、縁談に対する姿勢が極めて貪欲となる。また、自身が願う縁談の獲得のためなら反道徳的、反人道的、利己的な手段を厭わないことが一つの特徴であり、それが結婚に至らない段階にて悲劇的な結末がもたらされる主因となっている。

例えば「落蕾」秀英におとずれた「身分も違ふほどの金持からの縁談」<sup>28</sup>

---

<sup>28</sup> 同注8、p. 20。



は、秀英の母親がもくろんだ「一生金の不自由を（したくない）」<sup>29</sup>という個人の至福を優先する考えが反映され、貪欲な精神面を露にしているのである。それはヒロインに向けられた「こんな田舎で単調な、刺戟もなく成長してきた彼女にとつては身分も違ふほどの金持からの縁談程大きな刺戟はなかつた」<sup>30</sup>といった作者による批判交じりの解説から十分理解できよう。如何にして条件の良い縁談をもたらすか、この飽くなき執着心は往々に封建伝統への愛着を欠いた新女性に甚だしいものである。

同様に、「山茶花」娟が縁談を願った相手は「村で始めての大学生」<sup>31</sup>であり、これは将来的な「光栄」<sup>32</sup>な結婚生活を目論んだものであり、相手男性の経済力や将来性などを重視した意味では「落蕾」秀英と同程度のものであるのが分かる。以下はヒロインが適齢期になりその縁談を意識しはじめた段階の精神面が詳細に描かれた箇所引用である。

このごろ娟が素直に見えるのは、ずるくなつたせみだと姉はかんじるやうになつた。彼女の思つてゐることはやつぱり我儘なことばかりであつた。しかし今までのやうに一本調子ではなく、うまく人の隙を狙つて自分の感情を押し出していくやうであつた。人間の感情が人間の感情の陰をつたつて歩く巧妙さには錦雲はあきれて了ふのである。もし娟が男であつたら姉は妹を末恐ろしい姿に思はれて仕方なかつた。<sup>33</sup>

新女性ヒロインは新思想の影響を受け、封建制度を敵対視しているだけ、封建的な縁談により強い矛盾を感じ、抵抗と反感を示すものである。その脳裏には縁談のもたらす女性への不幸な光景があつたことも大きな要因であると言える。

「地方生活」淑が高学歴取得を決意した理由となるのも、姉の婉仔が論じた「某留學生が糟糠の妻を棄てた。某醫者が許婚者を破談した」<sup>34</sup>という当時、問題となつた歪な縁談の様相が脳裏にあつたからである。即ち新女性にとっての縁談とは自分の人生において生存か破滅を決定する重大問題であり、そこには道徳心

29 同注8、p. 29。

30 同注8、p. 20。

31 同注9、p. 295。

32 同注9、p. 295。

33 同注9、p. 193。

34 同注14、p. 291。



や人道的な体裁などが関与するゆとりはなかったと言える。極めて不憫な身の上であるが、最後はその打算的で利己的に変わりはてた性格が己の悲劇を招く要因となっている。

以上が新女性が縁談の影響により歪な人格形成がもたらされ、悲劇的ヒロインとして描かれた理由である。

## 6.2 旧女性の人格形成-縁談への無抵抗を通じて

続く旧女性型であるが、これら関連女性は新女性型とは相反し、「（「恋愛」への）空想で生きて行くのにこの世の中は余りに現実的になりすぎている」<sup>35</sup>と諦念し、往々に家父の要求による縁談を従順に受け入れ、理想放棄による服従を示し、無抵抗主義を通じた女性である。以下は「山茶花」作品の主人公男性のヒロインである錦雲に対する批判である。

賢は錦雲の姿をけがらはしく思はざるを得ない気がしてならなかつた。女と云ふものは、男さへ居れば誰でも夫たり得るやうな気がして、美しいものも区別のつけられやうがない。<sup>36</sup>

賢とは作者の分身で、ここでは新女性ヒロインと異なる意味での旧女性への批判が示されている。新女性ヒロインの縁談への取り組みが反伝統的な反逆を手段とするのに対し、旧女性ヒロインの場合は無抵抗と従属を貫き不合理な社会制度を助長しているのが特徴である。そのため、「みさを」翠鳳、「山茶花」錦雲、「闍雞」月里、「土の匂ひ」玉鑾はいずれも儒教道徳に支配され、新女性ヒロインの如く縁談が持ち上がる段階での破滅は免れるが、そのつけは結婚後における非人道的な扱いを被るかたちで訪れる。また、こういった嫁ぎ先での生活は往來の純真さや理想を消失させ、結婚後の嫁ぎ先での使用人の如く生活が祟り、より没個性的な女性へと成り下がらせるのである。

更に、このような没個性的な女性へと成り下がる意味では媳婦仔像として描かれた「部落の惨劇」淑花、「媳婦」阿蘭がより甚だしいと言える。今回取り上げ

---

<sup>35</sup> 同註9、p. 212。

<sup>36</sup> 同註9、p. 204。





た二人のヒロインは、幼女の頃から下女として扱われ、厳しい管理下に置かれ、多くの旧女性が娘時代に描いた青春や理想を持つ権利すらなかった。以下は「媳婦」阿蘭に関連する箇所引用である。

公學校を中途退學された阿蘭は、家事の手傳ひばかりしてゐたが、女友達に逢ふのが氣が引けていつの間にか、姑までじらされるほど卑屈な娘になつてゐた。(中略)

普通の娘のやうに青春のたのしさと云つたものは遂持ち合はさなかつた。そのうちにいつの間にか十八になつた。十八になつてみると自分と同じ歳の娘達が急にきれいになつたのをみておどろいた。<sup>37</sup>

「媳婦」阿蘭は「儉約な氣立てのいい娘」<sup>38</sup>という表面的な美德は評価されてはいるが、それは下女たる境遇で相応の厳格な躰を受けたからである。だが、その精神面での反面的影響は隠せず、例えば「地方生活」に登場した婉仔(淑の姉であり、他家に貰われた媳婦仔)の場合でも、「物心つく頃から、澤の嫁になると云はれてゐるので、特別王家には親しみを持つてゐるが、本能的に遠慮深く、引つ込みがちで大膽に振るまはれなかつた」<sup>39</sup>とあるのと同様、阿蘭が内向的に過ぎた「卑屈」な娘と転じたのもその媳婦仔たる身の上であつたからに他ならない。

### 6.3 新・旧女性ヒロインの性格形成—まとめ

張文環作品のヒロイン像にはその精神面での歪な様子を見ればかなり特殊な性格描写を施された人物であると言える。また、常に縁談という抑圧を被り、不安や緊張感を懐いた生活、或いは虐げられた非人間的な扱いを受けることは、縁談がもたらされる以前のヒロインたちがじゅうぶんに熟知していたことであろう。

ただ、その縁談への対処や受け取り方が、新女性と旧女性との双方のヒロインの間における違いを呈している。作者は特にその両者間の優劣などは考えてはいない。新・旧女性ヒロインの悲劇を描いたのも、あくまで当時の封建主義のもと

<sup>37</sup> 張文環、「媳婦」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷(張文環)、p. 320。

<sup>38</sup> 同注37、p. 323。

<sup>39</sup> 同注14、p. 279。



らした不合理な縁談の弊害と、その犠牲者たる女性のありのままを示したかったからである。

## 7 結論

今回着目した張文環小説作品におけるヒロインをめぐる縁談とは、ヒロインの希望や理想を奪う直接的な要であり、女性をして生存型から破滅型へ急展開させる場面設定そのものだと言えよう。ここまでの経過を見ても、張文環小説作品においてヒロイン本人を満足させた縁談は、貴族階級出身者以外は皆無に近い。結婚前のヒロインの胸中には訓導先生や医者や弁護士といった肩書きや職業で示された人物が理想の縁談相手となりながら、実際にもたらされた縁談はどれもが商店経営者や商店後取りの男性である。即ち、作者の考える縁談とは女性にとって極めて不利なものであり、生涯を左右する一大事であった。ヒロインは縁談という人生の岐路―幸福か不幸か―をめぐり、反抗或いは従属か究極の選択を迫られることになる。反抗を選んだヒロインの場合、往々に反道徳的手段に訴えるより術がなく、反逆的な性格を示さんがため極めて生への貪欲さを喚起せねばならない。また、反社会的な意味でそれ相応の過酷なリスクが伴われる。これは新女性ヒロインに多く見られるものである。

いっぽう、従属を選んだヒロインは道徳重視の考えから、縁談の成立こそが孝徳たる義務であると認めるが、その代価として、自己の描いた理想とは程遠い、過酷な結婚生活が余儀なくされる。これは旧女性に見られる傾向であり、結婚後に徐々に不幸がもたらされるものである。

以上の如く、張文環小説作品における女性悲劇は、円満な結婚生活を願いつつ、過酷な現実に打ちのめされた女性たちの運命論を基調にして描かれたものである。張文環小説における女性の命運は縁談によるところが強く、残酷な欠陥を有する縁談こそ、張文環にとって封建社会にある女性悲劇を描かんとする際に、絶対的に不可欠な要素であったと言えよう。



## 參考文獻

### テキスト

- 張文環 (1936) 「部落の元老」 『臺灣文藝』 第3卷第4、5合併号、pp. 2-17
- 張文環 (1943) 「迷兒」 『臺灣文學』 第3卷第3號、pp. 130-137
- 張文環 (1944) 「土の匂ひ」 『臺灣文藝』 第1卷第3号、pp. 3-46
- 張文環 (1944) 「雲の中」 『臺灣文藝』 第1卷第5号、pp. 55-64
- 張文環 (1975) 『地に這うもの』、東京：現代文化社
- 中島利郎(編) (1999) 『日本統治期臺灣文學 臺灣人作家作品集 第四卷[張文環]』、東京：綠蔭書房
- 中島利郎(編) (2002) 『日本統治期臺灣文學集成 2 臺灣長編小説集二』、東京：綠蔭書房

### 研究著書、論文など

- 張文薰 (2006) 「由『現代』 觀想『故郷』 —張文環<山茶花>作為文本的可能」 『台灣文學研究學報』 第2期、台南：國家台灣文學館籌備處、pp. 5-28
- 陳英仕 (2012) 「張文環『山茶花』析論」 『臺灣文獻』 179年3月、臺北：臺灣文獻館、p. 155-196
- 中島利雄(1999) 「張文環作品解説」 『日本統治期臺灣文學 臺灣人作家作品集 第四卷[張文環]』、東京：綠蔭書房、pp. 335-345

